

思い出す。神人同格教とか神人懸隔教とか、唯一神教とか汎神教とか、授業のテキストとして使われた先生の著『神道の宗教学的な新研究』を取り出してみると、いろいろ書込みがしてあって懐しく当時が思いおこされる。

國學院を出てから私はすぐ熊野那智神社に奉職した。

中世の熊野信仰の名残りもあって、靈現いやちこな神社で地方の人々の信仰を集めており、又境内の那智御滝飛滝神社には一般の観光客も多かった。その頃先生には御夫妻で熊野に御旅行なされ、那智神社に参拝された折、御一緒にカメラにおさまった写真が今もなお私のアルバムに残っている。

その頃私は、先生の御依頼があったかどうか、飛滝神社の御神体として崇められる那智御滝や、巨樟の空洞の中に祀られている大阪住吉神社境内の楠瑠神社などの資料をお送りした。先生が名著『神道の宗教発達の史的研究』を執筆しておられた頃で、程なく出版された一冊をわざわざ私にお送り下さった。拝見すると差上げた資料がいくつか掲載されており、又御丁寧にも序言に私の名

前まで挙げてその旨をお書き下さっており、先生の御懇篤なお人柄にただただ恐縮するばかりであった。

その後私は大阪の坐摩神社に転勤し、又戦前の風雲急な時代ともなつて、先生にもつい御無沙汰勝ちになつてしまつた事は、誠に申訳ない次第である。戦後も神宮外苑の管理や戦災復興の事業にたずさわり、仕事の関係もあつて自然、御晩年の先生に接する機会を失つた事は返すがえすも申訳なく、又残念なことに思っている。先年世界宗教会議等のことに係つて、いささか世界の諸宗教と接触する機会があり、その節改めて加藤先生の御著書を拝見し勉強させて頂いたりもして、今以て先生の学恩を有りがたく頂いている次第である。

加藤玄智博士の想い出

本学会理事
皇學館大學教授

鎌田純一

皇學館大學に勤務するようになって間もなくのことである。加藤先生よりお手紙を頂いた。「君は復興した皇學館大學へ行っているそうだが、その状況を聞きたいので一度来てほしい」とのような御文面である。早速と参上させて頂かねばならぬこと解りながら、「そのうちに参上させて頂きます」と返書させて頂いたまま、なかなか参上出来なかつた。すると、またどこで聞かれたのか「君は皇學館で古語拾遺を講じているそうだが、それならば是非話したいことがあるから早くきてほしい」とお手紙を下さつた。それで、一日御殿場へ参上させて頂いた。そのとき、先生は衰弱されて寢床に仰臥されていたが、しっかりしたお声で、どれくらいの間、ここに居られるかとお尋ねになる。急なことで返答に窮したが約二時間とお答え申し上げたところ、「それでは初め一時間私が話す。あとの一時間は君の話を聞くとしよう」といわれ、しばらくお話の内容を準備されるためか、じつと黙られ考えられた上、話し始められた。私はすぐノートしつつ拝聴したが、それは一つにはティーレの宗教

学批判より発して、先生御自身の学問目標よりその研究方法、その研究回顧よりして、現代における神道学の研究課題、ことに本邦生祠の問題にふれられて、その研究を継続してほしいとのことを懇切に話され、いま一つには古語拾遺に関連して、この研究も是非継承してほしいといわれるとともに、その景行天皇の条に日本武命が東征されるにあたり、倭姫命のもとへ行かれたとき、倭姫命が日本武命に「慎莫怠」と仰せられたとある。この「慎莫怠」、この句こそ、現代の日本人よくよく承るべき句である。よつて、伊勢へ帰り神宮別宮倭姫宮で、この句を記した掛軸でもよい、色紙でもよい、ともかく授与品として頒布し、国民がよくその意を体し得るよう神宮当局に話してほしいと話された。先生のお声、最後までしつかりとさせられていたが、途中御自身感じ入られ、御眼から涙がすつと糸をひき、中断されることもあり、先生が何を訴えようとされているか痛い程解らせて頂いた。このあとの件について、伊勢に帰つて早速と当時の田中少宮司にお伝えさせて頂いた。田中少宮司は、それ

を真剣な御面持でじつと聞かれて、「よく承りました。加藤先生にくれぐれもよろしくお伝えして下さい」とのよう回答されたが、そのときの田中少宮司の真摯な御態度も、印象深く脳裡に残っている。

あの御殿場の一日のこと、私にとって極めて重要であり、加藤玄智博士記念学会でどれだけのことをしなければならぬか、よくよく肝に銘じながら、力の及ばぬことである。

学勞窟の遺芳

大妻女子大学 望月 真

炎天下に終戦四十周年を迎え、往時を偲び実に感無量なものがありません。復員後の遍歴の中で乃木神社の恩賚により親しく加藤先生に師事できた時は蘇生の思いでした。神社復興に日夜尽瘁されていた高山貴名誉宮司の至

誠心に感応され、先生の晩年は乃木聖雄の鑽仰のために捧げられました。先生はよく「高山大人」と云われ、その実践躬行に意気投合し、乃木精神の闡明に心血を注がれました。先生と中学の同窓で、元國學院大學の石川岩吉学長は昭和三十一年発行の「知性と宗教」―聖雄信仰の成立―の序に「著者の長い学的生活は一に此の問題と決死の取組みを試み、遂に是れを克服したものと云えよう」と寄せられています。「神道の宗教発達史的研究」の大著など、東方学院の院長中村元博士もその学問的価値に賛辞を呈しておられます。乃木將軍の高邁なご生涯に神の光を仰ぎ、開眼されたと述懐されていました。学勞窟の近くの鎮守の社（厳島神社）の前を通られる時、いつも拝礼された敬虔なお姿が尊く偲ばれます。お弁当の割箸も使い捨てにせず、必ず洗って何回も使用され、乃木將軍がそうなさったと云われました。生活費も事欠く時、終始先生のお世話をされた杉浦千代様は青梅市の大洋園で余生を過されています。近在の人でも老博士を慕って教を乞うことがしばしばでした。畑作のお手伝いの